

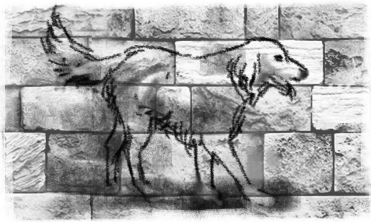
雪嶺集

〈宮坂静生 鑑〉

秋の高原

小林 貴子

十月の夕焼の階上れさう
刈りたてのうなじの如し鶏頭花
山薊いざ火口ほくちにと枯れいそぎ
秋蝶の羽の上下は死に近き
姫川の源流見よとバルコニー
姥百合のあれば握りて秋惜しむ
蓼科山は八ヶ岳のしんがり天南星
からまつの水漬く枝あり鶺鴒渡る
とりかぶと愛しすぎたと思ふ時
皮膜にて縛る身体三島の忌



一草庵

佐藤 映二

施餓鬼会や一鳥啼かず寶巖寺
頭を掠め着地の蝨蠍や一草庵
仁淀より栗とどけらる翌は望
一草庵主飲酒一代萩に月
参禅へ君の眸まみ澄む雁渡し
木の実踏む音聞かせばや鬼城の忌

四季と折り合っ

佐藤 映二

「バッハのこの曲は私を成長させてくれる音楽です。この作品の演奏には〈これで完成〉ということがなく常に新しさがありません」

アンドレアス・ブランテリド（一九八七年デンマーク生まれ）が、無伴奏チェロ組曲の日本での初演奏に先立ち、NHKのBSプレミアム番組制作者に対して語った言葉です。

思い出は一九七四年に溯りますが、往年のチェリストで親日家でもあったロストロポーヴィッチのリサイタルが、私の

駐在するフランクフルトで催されました。後日わかったことですが、彼は二年有効のビザを取得してモスクワから出国、そのまま米国への亡命を果たす途上のことでした。その最初の逗留先で弾かれたバッハの、この名曲をナマで聴く幸運に私は恵まれたわけです。

その晩の会場の緊迫した雰囲気は、冷戦の最中やむなく祖国を離れた演奏家の芸術への熱意を汲み取ろうとする聴衆が醸し出したものに違いありません。

若手チェリストのホープ、ブランテリドの伸び伸びした演奏を堪能して、四十数年前の私に戻った気分でした。